

第2章 本村の地域特性

1. 地理的・地形的特性

本村は、愛知県の西南部に位置し、東は名古屋市に、西は弥富市に接しています。また、本村は、濃尾平野の南端にあり、北東は日光川に、西は筏川に、東及び南は伊勢湾に面しています。

本村の北半分は、木曽川が形成した三角州にあり、その大部分は江戸時代末期から明治時代にかけて干拓によってできた新田地帯です。土地の起伏はほとんどない低地帯であり、海面より約1.5m低いいため、排水はすべて機械排水に頼っています。このため、豪雨時には内水氾濫が生じやすく、高潮や日光川等の洪水の氾濫の危険性が高く、地震時には沖積層が厚いため地震動が大きいだけでなく、軟弱な表層部の液状化の危険性が高い地域です。

本村の南半分は、昭和38年より地先海面に新たに造成された（名古屋港西部）臨海工業地帯で、北部が農業に、南部の臨海部は工業に特化するという二重構造になっています。

村内における地盤沈下は、昭和36年以降の累積で1m以上に達しており、最近では鈍化傾向にあるものの、依然として進行しており、高潮、洪水等による災害の危険が増加しています。

2. 気候的特性

本村の位置する海部南部地域の気候は、比較的温暖で、令和5年の最高気温は、7月の35.7度、最低気温は、1月の-4.4度、年平均が17.0度であり、また、年間総雨量は、1,339ミリでした。（海部南部消防組合「消防年報」（令和6年）より）



(2) 産業

産業は北部の農業地帯、南部の工業地帯と二重構造になっています。

北部は、米作りが主体の農業地帯ですが、都市化の進展に伴う宅地化や兼業化等農業をとりまく環境が厳しくなるなかで、都市近郊の有利さを生かしたトマト、花き等の温室栽培や、ネギ、ホウレンソウ等の露地野菜の栽培が行われています。

南部は、名古屋港域で西部臨海工業地帯を形成し、木材関連企業や航空機、造船、鉄鋼、電力、倉庫、運輸、自動車等の企業251社が進出しています。（令和6年5月税務課調べ）

(3) 土地利用

本村の特徴的な土地利用のあり方としては、宅地のうちの住宅地の部分が非常に少なく、臨海部工業地帯を編入した昭和45年以前と比較してもほとんど差異がないことです。つまり、約20年間に訪れた都市化や企業進出の中でも、工業地帯が「その他」「宅地」に参入された点を除けば、土地利用の基本的な方向に変化が起きていない点に、本村の特徴があります。

また、この間の農地の状況については、わずかずつの転用はありますが、全体からみればその割合は比較的少なく良好な農地の保全が図られています。

(4) 交通

村の東西を国道23号が走り、それに並行するかたちで臨海部には伊勢湾岸道路が走り、名古屋環状2号線が伊勢湾岸道路と接続し、それぞれ名古屋市、弥富市と結ばれています。また、村の北西部には南北に主要地方道蟹江飛島線、村東部には、国道302号が走っています。